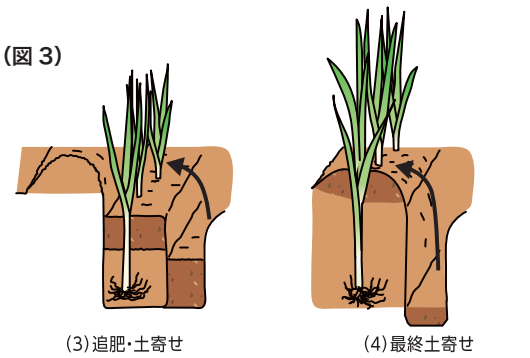
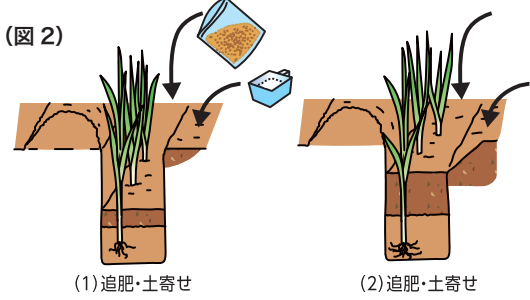
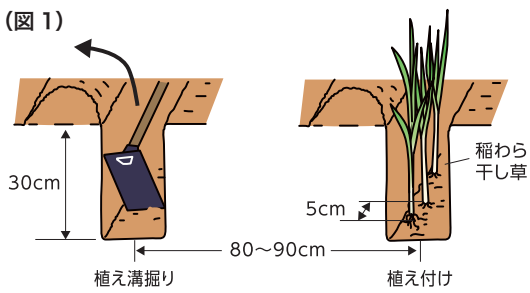


チャレンジ！  
**野菜づくり**  
根深ネギの植え付けとその後の管理の要点

3月頃に種まきした根深ネギ（白ネギ）の植え付けは、苗の太さが1cm内外に育った7月中旬〜8月上旬が適期です。

大きく育った苗には、この頃にネギアザミウマやアブラムシなどの害虫やさび病、べと病などが発生しやすいので、苗床に殺虫剤や殺菌剤を散布して防除しておきます。ネギの葉は薬剤が付きにくいので、



展着剤を加えることが大切です。

苗床から苗を抜き取る時には、根元にくわを打ち込み、根をたくさん付けるよう配慮して行います。

抜き取った苗は、大、中、小ぐらいに分けて植え付けます。こうすると畑で土寄せ、追肥をするときに、大きさに別けて区別して行うことができ都合です。

植え付けに当たっては、まずきちんとした植え溝を作ることが大切です。列の間隔を80〜90cm取り、くわ幅の30cmぐらいの深さの溝をきちんと作りましょう(図1)。

溝が崩れないよう上手に作るには、前作が終わったら前作の残さや草などを片付け、耕やさないで表面を硬くしておくことです。

大きさをそろえた苗は、階級ごとに3〜4cm間隔に、壁面に立て掛けるようにして垂直に植え付けます。

植えた後、根元に2cm程度の土を掛け、苗が倒れないよう根元を足で踏み付けておきます。その後すぐに溝いっぱい稲わら、干し草などを入れ、倒れないよう、また夏の乾燥、防暑を図ります。植え付け時には肥料はまったく与えず、もっぱら新根の発生を促します。次は、追肥と土寄せ管理です。

夏の暑さが遠のき始めるとネギは生育を始め新葉が増えてきます。この頃、溝の肩の部分に肥料(化成肥料・有機配合など)を施し、くわで軽く土と混ぜ合わせて溝の中に落とし込みます(図2)。

9月下旬頃からは盛んに生長しますので、15〜20日おきに第2回、第3回と追肥、土寄せを行います(図3)。全体的には追肥の重点は前半期に、土寄せは後半に、長い軟白部ができるようにします。

台風・強雨に見舞われたら、早めに畑を見回り、植え溝内の排水を図ります。ネギの根は乾燥には強いのですが、湿害には大変弱いので、対策は急を要します。風による倒れは曲がりの原因になりますので、できるだけ早めに起こすことが大切です。

## 肥料・農薬のご紹介

試してみよう！  
便利な展着剤！



農薬を散布しても葉や害虫に付着せず、多くが流れ落ちてしまうことがあります。これは野菜や害虫の表面に水を弾くワックスや糸状の物質があるためです。特に付着しにくい作物にネギやキャベツ等があげられます。

そんな時に便利なのが展着剤！展着剤の主成分である界面活性剤が、農薬の付着性と浸透性を高め、農薬の効果を安定させる働きがあります。いつもの散布作業に展着剤を加えてみましょう！

なお、使用方法や農薬によって様々なタイプがあります。

■殺虫殺菌剤用  
グラミンS・アプローチB

■茎葉処理除草剤用  
クサリノー・サーファクタントWK

サーファクタント30

どれを使うか迷った時はお気軽に各営農センター(営農購買課)までお問い合わせください。



## 今月の農家さん

### 教え合いの大切さ

野洲市須原  
東 敦志さん (39才)



野洲市で野菜農家を始めて3年目の東さん。きっかけは、耕し手のない畑が荒れているというニュースでした。おじいさんと一緒に野菜を作っていた頃を思い出した東さんは、いともたってもいられず農業大学で1年間研修をして、野菜づくりを始めました。

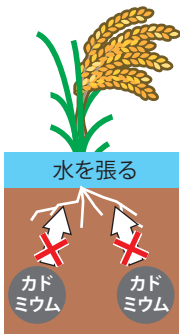
今はキュウリや長ネギ、オクラなどを手広く育てておられます。この時期はキュウリに力を入れておられ、現在ハウス2棟6aで育てているのを、この夏にもう1棟増設するなど順調に進めているそうです。

これまでには失敗もあったそうで、キュウリの接ぎ木苗づくりでは、半分近くを枯らしてしまったりと振り返ります。

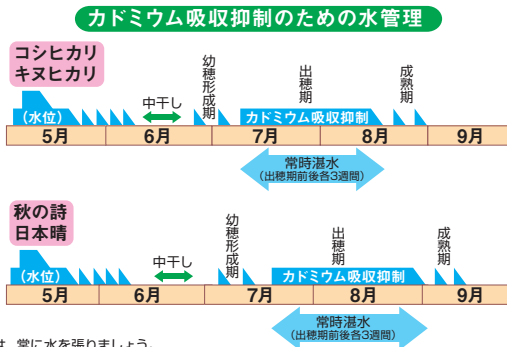
「最近先輩農家や、同年代の若手農家から様々な話を聞いたり、色々な相談に乗ってもらったりしています。自分で調べて作業をしていた時よりも上手くいくようになりましたよ」と東さんは教え合いの大切さを話します。

最後に東さんは「経験を積んで早く一人前になり、皆さんの悩みや相談にお答えできるようになりたいです」と今後の目標を語りました。

## 営農情報



穂が出る前後各3週間の時期は、常に水を張りましょう。



### ◆カドミウム吸収抑制対策について

カドミウムは人体に有害な重金属であり、農作物は根を通じて土壌中のカドミウムを吸収します。日本では「食品衛生法」により、米に含まれるカドミウムの基準値は0.4 ppm以下となっており、これを超える米は食用としての販売・流通が禁止され、生産者負担での回収や廃棄が必要になります。

対策として、穂が出る前後の各3週間(早生品種は7月10日頃～8月20日頃、中生品種は7月20日頃

から9月1日頃が目安)は、常に水を3cm程度張る『湛水管理』を行い、水稲がカドミウムを吸収しないよう努めましょう。

また、この時期の湛水管理は、胴割粒や白未熟粒などの発生を少なくし、米の品質向上に繋がります。

### ◆穂肥・後期除草剤について

穂肥の施用は収量の増大や登熟の向上など、稲の生育後期に重要な作業です。施用時期は基本的に幼穂の長さで出穂日を予想して判断します。コシヒカリ・滋賀羽二重糯は幼穂長1cm(出穂18日前)、みずかがみ・キヌヒカリ・日本晴は幼穂長1mm(出穂25日前)、秋の詩は幼穂長5mm(出穂20日前)が穂肥の施用時期の目安となります。また穂肥の施用量は葉色と株張りによって判断します。

また、この時期には雑草の防除も重要ですが、除草剤の施用時期に留意してください。例えば、一年生雑草やホタルイなどに効果がある「バサグラン粒剤」は収穫60日前までの施用となっており早生品種に使用される場合は注意が必要になります。

夏期農談会にて、説明や現地相談をさせていただきますので、ぜひご参加ください。